

■(250)支援を続ける人たちは自分らの「次」をもみすえて

東京都内の支援グループが10月、東日本大震災の避難所で出された「食事」の写真展を企画しました。被災した現地の写真家が約3カ月にわたって自らに配膳されたものを写したものです。冷めたおにぎりから温かいご飯、おかずつきの弁当と変化していきます。

誰もが関心のある食事を通じて、6年半余り前の大変だった時を思い出して、私らも次の災害への備えを考えてみよう。それが、主催したグループの呼びかけの狙いです。メンバーは都内の居酒屋の常連客らで、岩手県釜石市で毎年、被災者を励ます音楽イベントなどを催しています。昨年までは自分らで撮った写真で、イベントの様子や被災地の実情を報告してきました。しかし、6年半もたつと、周囲の関心もどうしても薄れていきます。そこで今年は、避難所の食事をテーマにすえました。写真家は、グループの現地でのイベントも撮影してくれる顔見知りです。写真のデータをすべて提供してくれました。

会場は公民館です。来場はぼつりぼつりですが、誰もが被災地の厳しさに驚きます。その記憶が、次の災害への備えにつながって欲しいと願い、グループの活動が続きます。(山)